「男、突っ走る！」

第107回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（24）　『オフィスツリーイン』代表

木内　孝志（53）　雅也の父

木内　真保（51）　雅也の母

木内　健次郎（20）　雅也の弟

国枝　茉奈（27）　佐代子の娘

北　まひる（22）　『スリジェネ』メンバー

月島　藍那（22）　ミュージカル出演者

山岡　智行（34）　映画プロデューサー

1　木内家・居間

雅也と真保が話している。

真保「東京？　こんなタイミングで？」

雅也「山岡プロデューサーから連絡があったの。前に撮影したヤンキー映画が、春先に配信映画として公開することが決まって、まずは関係者向けの上映会をするって。脚本書いた人間としては、やっぱり出席したいしさ」

真保「けど大丈夫なの？　ニュース見てる限り、東京じゃ、どんどんコロナ感染者増えてるみたいだけど」

雅也「コロナに感染した人と直接接触しなければ、感染する心配もないんだから」

真保「……」

雅也「あくまで関係者だけで集まるだけだから」

真保「感染しないように、くれぐれも気を付けてよ。薬もまだ開発されてない、脅威的なウイルスなんだから」

雅也「分かってる」

心配そうな顔の真保。

2　新宿駅（夕）

雅也が歩いている。

N「この頃、東京でのコロナ感染者数は広がりつつありましたが、休校要請が出ていたことが嘘のように、東京の街はまだ人に溢れていました」

3　レンタルスタジオ

雅也がドアを開ける――既に山岡や、映画のキャストやスタッフたちが揃っている。

雅也「すいません、遅くなりまして」

山岡「木内さん、ご無沙汰してます」

雅也「年末以来ですね。今のところ、こっちのほうは大丈夫ですか？」

山岡「まあ何とか……。ただ、今の感染状況を見るとどうなることか」

雅也「家族にも反対されましたが、せっかくの機会ですし、脚本の立場としてはやはり出席したいと思いまして。（と紙袋を渡して）あ、これ。いつもの地元のお土産です」

山岡「ありがとうございます。（と一同に）木内さんからお菓子の差し入れいただきました」

拍手をする一同。

×　×　×

プロジェクターに映像が投影されており、一同が見ている。

N「上映会で映画を見ている間、自分の中でどうしてこんなセリフを書いたのだろうと自問自答していました。思えば、この映画の企画が動き出したのは、まだ僕が専門学校の頃でした。学校の教室で一人、自習をしながら原稿を書いたことは今となっては良い思い出でした。本当は東京観光をゆっくりしたかったのですが、この状況下のため、翌朝の高速バスに乗ってすぐ、愛知へ

戻ってきたのでした」

4　農場公園・表（数日後）

雅也、茉奈、まひる、藍那が歩いている。

N「それから数日後、カメラの練習のためにモデルになってほしいとまひるから頼まれ、茉奈さんや藍那と共に農場公園に遊びに行きました」

5　同・広場

ベンチで両隣に座っている雅也と藍那――一眼カメラを持って撮影しているまひると、付き添っている茉奈。

まひる「二人とも、もう少し寄ってください」

雅也「はいはい」

藍那「こう？」

茉奈「ああ、良いね。このツーショット」

まひる「尊すぎます。本当に尊い（と何度もシャッターを押しながら）あ、あ、待って。

すごく良い」
雅也「まひる、ちょっと落ち着きなさい」
まひる「だって、こんなすごい写真撮れるんだよ。良かった、スリジェネに入って」
雅也「藍那は違うんだからね」
まひる「分かってるよ。本当だったら、モデルの藍那ちゃんにこんなこと頼むなんて恐れ多いんだけどさ」
藍那「良いんだって、私は。まひるちゃんのためだったら、いくらでも練習に付き合うから」
まひる「ああ、本当に嬉しい」
茉奈「私も撮っちゃおう。（とスマホで写真を撮ると）ああ、これは良いわ。お母さんに送っとこう」
雅也「送るんですか、国枝さんに」
茉奈「この写真見たら、お母さんも喜ぶよ」
苦笑してお互いの顔を見合う雅也と藍那。
×　×　×

いろんなポーズをしながら、まひるのカメラに映っている雅也と藍那――写真を撮るたびに、跳ね上がっているまひると茉奈。

6　同・レストラン

雅也、茉奈、まひる、藍那が食事をしている。

茉奈「いつもなら平日だったら、もっと人来てるんだけどね。やっぱりコロナの影響かな」

藍那「だと思いますよ。私も、撮影会が続けてキャンセルになっちゃって」

雅也「そうなの？」

藍那「多分大丈夫だろうって思ってたんですけど、中止になるなんて。せっかくうっちーさんに、ホームページや名刺も作ってもらったのに」

雅也「こればかりはしょうがないよ。誰が悪いとかってわけじゃないんだから」

まひる「（茉奈に）カフェのオープン、大丈夫ですか？」
雅也「そうですよね。これからってときに」
茉奈「一応、オープンは予定通りに行おうって、お母さんと話してるの。今日も、商工会議所のセミナーに行ってるみたいでね」
雅也「国枝さんも、『神様が願うまで』が終わって、ようやくひと段落できたんでしょう」
茉奈「まあね。あの時は、本当に大変だったから」
藍那「キャストの私たちでも、運営側が大変だったっていうのは、察しがつきますけどね」
雅也「ほら、リハーサルの時、百二十分になっちゃったことがあったでしょ。あの時、国枝さんや市役所の要望としては九十分以内に収めてほしいってことだったの。百二十分は長いからって」
藍那「確かに、あのリハの時から大分カット

したもんね」

雅也「ヤマさんの言い分としては、演技の間とかテンポが変わることもあるから、一概に九十分に収めることはできないって。でも、国枝さんは何とかして九十分に抑えてほしいって伝えんだってさ」

茉奈「お母さんも、家でいろいろ言ってたからね。まあうっちーも、ヤマさんを中心とした演劇一派と、お母さんグループ一派と、私たち運営と、住吉先生のダンスグループ一派といろんなところで板挟みにあって大変だったね」

藍那「よくそんな状況で、私とカップル役なんてできましたね」

雅也「まあ『サンドバックのうっちー』なんて言われるぐらい、いろんな人から愚痴聞かれたこともあったよ。でもさ、藍那とカップル役はやらせてもらえたし、子どもたちも元気だし、それで何とかやりきれた」

まひる「確かに、今でも子どもたちは元気で

すもんね。りゅーた君なんて、相変わらず
うっちーにべったりで」
雅也「そういえばね、この間りゅーたと一緒
にお昼食べに行ったの。そしたらりゅーた、
いきなり敬語になったんだよ」
まひる「え、りゅーた君が敬語？」
雅也「そう。メニュー表を俺に見せてくれて、
『うっちーさんは、何にしますか？』って
言ったり」
藍那「あんなに元気なりゅーた君が、うっち
ーさんに敬語なんて」
茉奈「意外だね」
雅也「あの子も春から小学六年生でしょ。ま
あ、早い思春期みたいだと思えば。だって、
十三歳年上の人と二人でお昼食べるってこ
と考えたら、誰だって緊張するし」
藍那「そうだよね。一回り以上年が離れてる
人だと、私だって緊張するもん」
まひる「りゅーた君らしくって、可愛いじゃ
ないですか」

雅也「まあね。ああいう、純粋な子どもたちがいたから、俺はあの状況でも何とかやりきれることができたの。それに、最後に何とかお母さま方のフォローもしなきゃと思ったから、締めの挨拶のときに、お母さま方のことも話したんじゃない」

×　×　×

〈フラッシュ〉

雅也「今回改めて感じたのは、特に子どもたちなんですが、しっかりとフォローをしてくださっている保護者の皆様の力が必要不可欠であるということを気づきました」

×　×　×

まひる「ああ、そんなこと言ってましたね」

雅也「あっちにも良い顔、こっちにも良い顔ってするつもりはなかったんだけどさ、いつの間にかそんなポジションになってて」

藍那「しょうがないですよ。うっちーさん、相談されやすいタイプなんですから。まあ、そういう私だって、うっちーさんにお願い

しちゃったわけですし」
雅也「そういう運命なのかな。俺もさ、つい任されちゃったり、頼まれちゃうと断れないからさ」
まひる「ホームページ見たよ。藍那ちゃんらしかった」
藍那「あれは、全部うっちーさんに頼んでやってもらったの。深夜までファミレスに入り浸って、一緒に相談しながらやってね。（と雅也に）その後でしたよね、一緒に肉バルの店行ったの」
雅也「あのお店、美味しかったね」
まひる「肉バルの店って、何ですか？」
雅也「クリスマスイブにね、一緒に食事に行ったの」
まひる・茉奈「（唖然と）クリスマスイブ」
雅也「勘違いしないでよ。ゆっくり食事しようと思ったら、たまたま空いてたスケジュールがその日だったんだから」
藍那「クリスマスプレゼント、ありがとうご

ざいました。コンディショナー、もったいなくてまだそんなに使ってないんです」
まひる「コンディショナー？」
雅也「こちらこそ、ハンドクリームありがとう。俺ももったいなくて、たまにしか使ってないんだよ」
茉奈「ハンドクリーム？」
藍那「クリスマスってこともあるので、お互いにプレゼント用意したんです」
まひる「ほぉ」
雅也「女の子にプレゼントなんて滅多に渡したことないでしょ。だから、専門学校の友達に相談しちゃってさ」
まひる「ガチじゃないですか」
雅也「そりゃ、藍那に渡すクリスマスプレゼントだもん、ちゃんと考えるに決まってるじゃん」
藍那「アイシャドウもプレゼントしてもらったんですけど、今日つけてるんですよ。（と目元を指さして）ほら、この赤いやつ」

茉奈とまひる、藍那の目元を見る。
茉奈「あ、本当だ」
まひる「至近距離で見ても、藍那ちゃん、綺麗すぎる」
藍那「やめてよ、恥ずかしい」
まひる「知らなかったなぁ。それに、クリスマスイブに食事したことだって、初耳です」
茉奈「お母さんに伝えようかな」
雅也「やめてくださいよ、すぐ炎上しますから」
茉奈「はいはい」
まひる「（藍那に）撮影会が再開したら、また教えてね。私も、まだカメラは全然だけど、藍那ちゃんを美しく撮れるように腕上げるから」
藍那「ありがとう。楽しみにしてる」
N「コロナ感染が危ぶまれる中、何とかスリジェネアカデミーのレッスンは通常通り行われていました。しかし、これ以上事態が悪化する前に、僕はしばらく会っていなか

った父方の祖父母に会いに行こうと思い始めていたのでした」

7　木内家・居間（夜）

雅也が、食器を洗っている真保と話している。

真保「尾道に行く？」

雅也「うん。コロナの影響もあって、スケジュール帳もしばらく真っ白になっちゃったでしょ。しばらくいろんなことが続いたから、ちょっと休養期間にしようかと思ってさ」

真保「そう……」

と、風呂上がりの孝志が入ってくる。

孝志「（雅也に）風呂、もう良いぞ」

雅也「うん」

真保「（孝志に）ねえ、雅が尾道行きたいって」

孝志「え？」

雅也「コロナがこれ以上拡大したら、次いつ

尾道行けるか分からないでしょ。前に広島に行ったのは、もう四年近く前でしょ。それに、一回ぐらい一人旅したいなって思ってたの。だから、変にコロナが拡大する前に、一度おじいちゃんやおばあちゃんにも会っていきたいし、もっちゃんや、りかっちにも会いたいしね」

孝志「分かった」

真保「あんた……」

孝志「尾道には、俺から連絡しとく。いつから行くんだ？」

雅也「四月一日に新年度の仕事スタートって考えると、三月末に、まあ三日か四日ぐらいお世話になろうかな」

孝志「分かった。そう、伝えとく」

真保「……」

雅也「よろしく」

8　コンビニ（夜・数日後）

栄養ドリンクを買っている雅也――レ

ジ打ちをしている健次郎。
健次郎「良いなぁ、兄貴だけ」
雅也「仕事の予定が無くなったから、充電期間にするの。パソコンも持ってかない」
健次郎「そっか。深夜のコンビニも、客足減ってきてるんだよね。そりゃ、荷物の運搬とかはあるけど、それ以外は正直暇なんだよ。最近は、廃棄も多くなってきてるし」
雅也「コンビニまで人が来なくなったら、おしまいか」
健次郎「ここがなくなったら、困るけどな」
雅也「多分、コンビニは大丈夫でしょ」
健次郎「うーん」
雅也「じゃ、行くわ。夜勤頑張ってね」
健次郎「ありがとうございました」

9　木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンで仕事をしている。
N「父が祖母に連絡をしてくれて、広島行きは、三月二十七日に決まりました。一日前

には、広島市内に住む従姉の元を訪ねることを本人に連絡をし、承諾をもらいました」

10　同・居間

テレビのニュースを見ている雅也と真保。

N「三月二十一日には、国内の累計感染者数が千人を超えることになり、コロナ感染の状況は悪化する一方でした。ですが幸いにも、この時はまだ愛知も広島も影響がなかったことから、広島への旅は予定通り行うことになりました」

11　同・玄関（数日後）

雅也と孝志が出かける支度をしている

――見送りに来ている真保と健次郎。

雅也「じゃあ、行ってきます」

真保「おじいちゃんたちに、よろしくね」

健次郎「お土産よろしく」

雅也「はいはい」

孝志「よし、じゃあ行くか」
雅也「うん」

12　道を走る車（夕）

13　その車の中
　運転している孝志、助手席に雅也。
孝志「素子、最終日に来るらしい。ばあちゃんから連絡があった」
雅也「そう。じゃあこれで、みんなに会えるわけだ」
孝志「じいちゃん、最近大分耳が遠くなったみたいだ。この間電話で話した時も、会話が上手く成立してなかった」
雅也「まあ、八十も越えてるしね……」
孝志「向こう着いたら、みんなによろしく伝えといてくれ」
雅也「分かった」

14　駅・ターミナル（夕）

孝志の車が止まる――助手席から雅也が降りると、後部座席のドアを開けて、スーツケースを取り出す。

雅也「行ってきます」

孝志「行ってらっしゃい」

雅也、スーツケースを引きずりながら、中へ入っていく。

15　木内家・居間

真保が夕飯の支度をしている。

16　名古屋駅・新幹線口

スーツケースを引いた雅也が歩いている――立ち止まると、電光掲示板を確認する。

雅也、切符を通して改札の中へ入っていく。

17　道（夜）

孝志の運転する車が走っている。

18　新幹線の中（夜）

小説を読んでいる雅也。

19　コンビニ（夜）

レジ打ちをしている健次郎。

20　広島駅・表（夜）

雅也が改札口から出てくると、スマホを撮りだして『広島駅』の看板の写真を撮る。

N「実に四年半ぶりの広島でした」

つづく